

第29回 MASセミナー

「素材・光・建築」

日時:2018/12/8(土)
講演:14:00~16:00

建築と光、シェルターを彩るものは様々です。始まりは、様々な危険から身を護る閉じた空間=室内空間でしたが、洞窟住居から暫くは内部は暗いものでした。発展し多様化する中で、光や通風・音が大切になりますが、その辺りから近現代建築の意味と魅力が増して来ます。近世には大きな住宅から様々な建築種別が分離独立し、光も通風も装置も、所謂F F E (家具・仕上げ・機器設備) も大いに働き始めます。(司会 湯本長伯)

「素材・光・建築」

ある映画で中年の男どうしが食事をしながら、「男が正直になれるのは朝食のときだけだ」という台詞がある。また、フランスの中世の英雄ジャンヌ・ダルクが宗教裁判にかけられるシーンでは「余生を小鳥のさえずりや青空を感じることに無い地下牢ですごくくらいなら...」と言い火あぶりの刑を選ぶシーンがある。これらの背景にある「光」その力がさまざまな人の行動に影響をあたえてきたことを素材・建築空間を通して考えていく。



今井 均

「やはり、ちょっと違うヨーロッパ人の感覚」

ヨーロッパの教会に入ると、暗闇とステンドグラスからの光で、肅然とした気持ちになるのは、もう誰でも知っている。石積み空けられた孔、という現実が光の価値を増す。これをモダニズム最後の建築家と言われるアンジェロ・マンジャロッチェは、ペア・ガラスの箱に変え、中に白いスタイロフォーム状のシートを挟み、日本の障子のようにした。紹介されたときは衝撃的で、我々の素材と光への柔軟な心を、近代材料で先取りされたという気にもなり、ミラノに行きたくなくなった理由の一つだった。(「バランザーテの教会堂」1957)しかし、神は許さなかった。20年余り後になって見ていってみると、内装材が熱で溶けて、ガラス面の下半分に沈み、見る影もない。予算が無いのか、廃墟のような状態のままだった。(現在は知らない)



大倉富美雄



黒木 正郎

父親の実家であった家が先日解体された。昭和24年に完成した平屋建て、20坪程の戸建住宅であった。外壁がコンクリートブロック、小屋組と内装は木造という、現行法規ではおそらく建てられない構造だが、70年間幾多の地震や台風にもめげず外壁にヒビ一つなく床も水平で、一部の木製建具も最後まで機能していた。当時の粗悪なブロックと廃材だけで組まれた小屋組の家がここまで頑張れただのは、ひとえに施工の丁寧さゆえである。漆喰で包まれたつけ庇が少しも壊れていなかったことからそう思う。素材は人の手で生命を宿し人が思いを注いだ分だけ生きられるのだ。光について。古いが明るい家だった。モダンリビングのさらに先駆けの、公庫融資第2号案件だったから、戦後の世の中に光さすことを意図した作りだったのだろう。尤も、敷地が90坪もあったので、周辺環境がことのほか良かったせいでもあるのだが。



武田有左

初めて自分が手掛けた建物が竣工した時のことです。夜、照明が灯った空間に立った瞬間、これが本当に自分が設計した建築空間なのかと驚いた経験を今でも思い出します。それは、海藤春樹という気鋭の照明デザイナーと共に設計をした建物でした・・・自分が吟味をし尽くしたハズの素材や空間が、光の入れ方次第で、設計者自身が思ってもいかなかった様相に変容するものだ。このことを改めて認識したのは、コンピュータを使った設計を始めた時です。モデリングに加えて色や素材の設定だけでなく、吟味した光の定義を通してはじめて、自分が意図した建物の姿がディスプレイに映り込む・・・

駆け出しの頃に経験した二つの貴重な体験を通し、建築設計とは単にプランを描き素材の選定で終わるのではなく、建ち上がる空間に最も相応しい光を導くことであるという、建築家としてのスタンスが決定付けられました・・・

「その場所にあるもの」

光と素材と建築、というテーマを考えると、20年前に見た北欧のヘルシンキの教会が思い浮かぶ。テンペリウキオ教会は、ハイサイドライトから落ちる自然光が教会の岩壁を照らし、自然の岩の不思議な陰影が美しい教会だった。建築の素材は、近代以前はそこにある石や木、土などの自然資源だったのだなあ最近よく考える。ヨーロッパは圧倒的に石や岩が建築の素材だった。一方で日本は、木と紙、土、という素材を使っていた。素材と光に関する感性は、西洋と日本ではだいぶ異なっていると思う。日本人は光と素材、建築をどのように感受しているのか、あらためて探求してみようと思う。



田口 知子



「脇役と主役」

「素材」には歴史が埋めこまれている。木材は年輪があり、石は結晶がある。だから木、石は歴史の重みを感じられ温かみのある素材となる。鉄はその中間。人の手のかかり次第で素材の表現が変わる。ガラスも同様。冷たい板ガラスはただの材料で、吹きガラスは素材。「人の手」のかかり具合で素材にもなるし、ただの材料にもなる。その判断は建築家の仕事であり、空間の質を変えていく。それでは「光」はなんであるのか。わたしは、その素材を引き立てる「脇役」であると思う。あくまで「素材が主役」だが、脇役の効果次第で映画の良さが変わると同じ。



宮田多津夫

建築家は監督なのだが、主役と脇役が決まってもそう簡単には空間は作れない。映画が簡単に作れないのと同じで、建築も難しい。

「建築の使命と光」

先ずショーペンハウアーのことばを記します。「およそ光があるということが、美にとっては欠くべからざる条件であり、もっとも美しいものでさえ、光が都合の良い位置にあることによって、さらにその美しさを高めるのである。しかし他のなにを置いてみても、光の恩恵によってその美しさが高められるのは建築物であって、じつにとるに足らぬ建物でも、光の具合いかんによってはこのうえなく美しい対象になるのである」彼はさらに、建築の使命は光の本質を顕現させることだと著しています。今回は素材としての光について教会の建物を通してお話させていただきます。

※Arthur Schopenhauer1819 西尾幹二訳『意志と表象としての世界II』中央公論新社 2004p81



村上晶子

「マテリアリティ (材料性)」

ロンドンにあるAAスクールという建築学校の課題で、マテリアリティが出た。これはマテリアル(材料)ではなく、材料性という意味で、材料が持つ様々な要素、すなわち、強度、色、テクスチャー、匂い、叩いた音などを含んでいる。私は、ドックランドのプロジェクトで、ドック(人工池)の水面の光の反射に着目し、水面を他の材料で表現しようと考えた。パンを青色に塗装し、サランラップで包み、ランプで斜めから光を当てたところ、水面の反射以上に美しい写真が撮れた。しかし、もはやパンだと思って食べる食欲は生じない。本物を偽物が超えたと解釈できるが、偽物の元の性格は無くなっている。教授からのアドバイスは、この関係性をプロジェクトに活かさない、とのこと、いやはや益々、課題が難しくなった。建築家は単なる材料ではなく、多様な要素を持つ材料性を扱いかいデザインに活かさなければならない、という建築家教育なのである。



連健夫